



教職大学院

Newsletter No. 82

福井大学大学院 教育学研究科 教職開発専攻 since2008.4

2016.4.2

福井ラウンドテーブルに参加して

白梅学園大学 教授 無藤 隆

今回、2016年2月末の福井ラウンドテーブルに参加することが出来ました。私が参加したのは、オックスフォード大学のH. ダニエルズ教授とともにシンポジウムを行うことと、分科会でいくつかの議論に参加することでした。シンポジウムでは、学校の建築デザインと実践との関連について考えました。ラウンドテーブルでは、教職大学院のあり方とともに、幼小・小中・中高の連携接続の問題を考える機会を得ました。

まず、最初に伺ったのは、シンポジウムの前日に、福井市立安居中学校でした。かなり福井市でも農村部にある中学で、数年前に新しい建物を建てているのです。ダニエルズさんがまさにその研究をしているということで、興味津々に見て回り、我が意を得たりというように興奮をしてました。広い円形の真ん中は皆が集まるホールで、その外側に、教員室や教科ごとの部屋があり、その外側に一周する廊下、さらにその外側に教室などがあって、開放的に使われます。建物がオープンであるだけでなく、その使い方も時間割を持ちつつ、柔軟にグループや個人別の活動を組み合わせるようにしています。廊下などに貼ってある掲示物もすべて中学生が自ら貼っているのだと言います。授業の後は掃除ですが、ちょうど廊下を雑巾掛けしているところに出会い、改めて日本の学校での掃除の大事さに思い至りました。特筆すべきは、開設前の数年の準備期間とその後の実践の開始以降に、各々実践者と関係者が集い、あり方を定期的に検討してきたことです。素敵なデザインがそれだけに終わらず、実際に新たな実践のあり方を可能にする点がよく見えます。

シンポジウムでは、ダニエルズさんが建築デザインを確信した5つの学校のその後の検討の研究を提示してくれました。それらの学校はその後の実践の動きがかなり異なり、校長と他の教員たちの実践へ

の志向により、建築の良さは活かされもするし、帳消しにされもするのです。「デザインと実践」の関係のあり方そのものが肝心であり、建築デザインが単体で実践をよくすることはない。とあって、建築デザインは実践の可能性を作り出すものでもあり、その良さをいかに実践者が活かして、新たな実践を作り出すかの検討がなされました。

私はそれに対して、安居中学校に実践を思い浮かべながら、「学校建築デザインのヴィゴツキ的アプローチを拡張する」ことに向けて、ダニエルズさんの議論をこうまとめました。「学校の建築デザインの改革は実践の変革を伴って意義があることや、単に建築だけでは、可能性を作り出すが、それを活かさないことも出てくるのであり、実践を変革し続けることが必要なのである。」その上で、その考えを、我が国に活かすとしたら、建物を改築できない既存の学校での適用可能なところで進めていけるだろう。それは室内の家具その他の移動や、思考のための板書その他の道具を用意し、子どもに手渡していくこと、教科自体を記号的道具と見なして、その獲得の柔軟で能動的あり方を模索することを提案しました。

内容

- 福井ラウンドテーブルに参加して (1)
- スタッフ退任のご挨拶 (2)
- ラウンドテーブル (4)
- 長期実践研究報告会 (7)
- 冬の集中講座 (9)
- インターンシップ/週間カンファレンス報告 (10)
- 研究集会・公開研究会などの報告 (11)
- 修了生の学校改革実践研究報告タイトル (16)

ラウンドテーブルでは、特に、幼小、小中、中高の連携と接続の問題を論じました。講師の側が現場の情報その他を提供し、参加者がラウンドになって、各々の実践経験を話したわけです。私は特に校種間の教師の相互理解やカリキュラムの接続ということを強調しました。参加者の意見や経験では、地域や学校の特質を背景の実情が話され、視野を広げるのに役立ったと思います。

以上の刺激的な二日間でした。それを基に、こういったラウンドテーブルの意義を考えてみると、いくつもありそうです。

何より、研究者と実践者の垣根のないこと。実践的研究者と研究的実践者が入り交じり、むしろ同じ場から実践を見て、また研究を見ようとする姿勢が共有されます。

第二は、何度も参加する人が増えてきながら、福井の地に集まる人の起こす波紋が全国に広がり、ま

たそこで新たな波を作り出す様子が見えることで

す。第三は、シンポジウムや教職大学院の実践研究の発表なども交錯しつつ、現場での情報交換の背景が大きく広がっていくことです。現職の研修としても、高度な最新の知識を得つつ、それぞれが自分の仕事を見直す場としているように思えます。

第四、これは参加者にとって一種の変換（トランスフォーメーション）の場となっているのではないのでしょうか。単に新たな情報を得るということを超えて、自分の仕事をどう生きるかというところに常に戻りつつ、その仕事の枠組みを転換する作業をしているように思えます。それは本来、教職大学院の使命そのものであるはずなので、その意味で、ラウンドテーブルがその集約となり、凝縮された時間が次の可能性を大学院に対しても開くのかもかもしれません。

スタッフ退任のご挨拶

福井大学教職大学院 教授 森 透

私はこの3月31日で福井大学を定年退職致します。関係の皆様には大変お世話になりましたことに深く感謝致します。1985年9月1日に福井大学に採用されてから30年がたちました。この30年間は長かったようでもあり、短かったようでもあります。振り返りますと、いろいろな思い出が頭をよぎります。最初は附属小学校の低学年の冒険遠足でしたでしょうか。当時の附属小が今でいう生活科や総合学習みたいなことにチャレンジしていて、学生を連れてビデオを担いで子どもたちを追いかけた思い出があります。次は長野県の伊那小学校の総合学習ですね。当時学生たちと総合学習について調べていて、愛知県の緒川小学校にも行った思い出があります。伊那小の総合学習は土台が違っていました。子どもの求めを大事にすること。教師の思いはいっぱいあるけれども、子どもと向き合うこと。子どもたちの持続的な探究活動を大事にすること。いろいろなことを考えながら伊那小を学生たちと訪問していました。当時から「伊那小ツアー」と称して大型バスを借りて夜行バスの弾丸ツアーを始めたのではないかと思います。

大学では密かに「4人組」と言われていたようですが、寺岡・松木・柳沢・森の4名がそれぞれ大学も違えば専門分野も違うにも関わらず、高い「理想」は共

有していたように思います。お互いに激しい論争もしましたが、今まで分裂・分解をしなかったのは、お互い性格も様々でしたが、どこかで信頼感をもち「理想」を共有していたことがありました。私が福井大学に着任しなかったならば現在の私は存在しませんので感謝しかありません。4人はいろいろなことにチャレンジしてきました。学会で教育実践研究の方法論をめぐる共同発表、1994年度からのライフパートナー、1995年度からの探求ネットワーク、他方、学部改組で新課程ができると「コミュニケーション研究」という学生たち主体の授業にもチャレンジしました。社会学の伊藤勇先生が中心となって教育学・心理学・国語科教育・文化人類学など、様々な専門分野の方々と「コミュニケーション」について考えました。

大学院教育学研究科が設立されると、現場の先生方が福井県から派遣されご自分の課題意識を持って研究に没頭しました。現場の先生方は多忙なので1年間の時間的猶予は非常に貴重な期間であることはよくわかりました。でも、2年目に職場に戻ると職場では忙しい毎日の中で修士論文を書かなければなりません。この修士論文は現場での実践とは必ずしもリンクしないケースが多かったように思いました。教師教育を目指す大学院がこれでよいのだろうか。現場から派遣される先生方に一番求められている大学

院の在り方や実践研究とはどのようなものがよいのだろうか。私たちはいろいろと考えて「学校拠点」の大学院を構想し、2001年度から「学校改革実践研究コース」として試行的に実践を開始しました。そして、この取組みをもとに2008(平成20)年度に創立された大学院が教職大学院なのです。

教職大学院も9年目に入ります。長いようであるという間という感じもします。第1期生からの修了生の顔が浮かびます。現在はどのような実践をされているのでしょうか。教職大学院での経験が現在の職場の実践に繋がっていることを願わずにはおられません。この4月から教職大学院も新しい段階に入ります。様々な期待に答えつつ、地道に歩むことに期待します。

最後に、3点ほど申し上げておかなければならないことを述べたいと思います。第1は2015年3月に起こった事件のことで、非常に残念な事件でしたが、当事者の方とはそれまでいろいろと会話をしてきましたので、二度とあのようなことが起きないことを願うばかりです。第2は二宮先生の急逝のことで、前日の教授会でもご一緒しましたし言葉も交わしました。2月6日(土)の昼ごろに公開研究集会をしている伊那小学校で訃報をお聞きしました。二宮先生は本当に優しい先生でお酒の席が大好きな方でした。

よくご一緒させていただきました。若い先生方への深い愛情と院生への温かいまなざし。心より哀悼の意を捧げます。最後の第3はこれからの福井大学の方向性のことです。先日の3月18日(金)の夜に学部の先生方にホテルフジタで送別会をしていただきました。退職する複数の教員の送別会でした。最後の一人一人の挨拶のときに、私はまことに勝手ながら、私の愛唱歌である「マイ・ウエイ」を歌わせていただきました。自分の信じた道を歩むという歌です。それを歌う前に一言申し上げました。人は立場や考え方が違って、時間をかけ丁寧に語りあうこと、お互いの不信感を信頼感に変える努力を惜しまずに、あきらめずに続けていけば必ず理解し合える、お互いに人間だから、というようなこととお話しさせていただきました。合意形成と民主主義です。そこでのスピーチでは「とことん話せばお互い人間だから理解し合える」という表現だったと思います。4月から新学部ができ、大学院も近い将来統合される予定だと思います。学部・大学院の構成員の一人ひとりが大事にされ、それぞれの持ち味や個性が活かされる大学になっていただきたいと切に願っています。私もこれからお手伝いできることは何でもさせていただきますと考えています。皆さん、お元気に。(2016年3月21日記)

福井大学教職大学院 准教授 小林 真由美

この度、3年間の大学勤務を終え、再び、学校現場に戻ることになりました。教職大学院のスタッフの皆様、院生の皆様、そして関係各位の皆様、本当にお世話になりました。心からお礼申し上げます。

例えば3年前、大学に赴任した当初は、大学というところがどういう場所なのかも分からず、毎日毎日、なんの役にも立てない自分に自己嫌悪で、結構、深く悩んでいました。あるとき、そんな私の悩みを聴いてくださった校長先生から「今は貢献より蓄積のとき！」と言われ、あつかましくもその日から私は開き直って、とにかく自分の中に多くの体験と知識を得て蓄積しようとして一生懸命になりました。たくさん学校とかかわり、たくさんの授業を参観し、多くの方々との出会い、県外のみならず、海外にまで出かけ、本当にたくさんの蓄積をさせていただきました。「授業を見るというのはどういうことなのだろう」「18年教育の意義とはなんだろう」「これからの教師教育をどう考えるのか」「今、自分はどんな学校づくりを理想とするのか」など現場にいたときには、ほとんど考えてみたこともなかった「問い」がわき起こり、時には自分の教員人生を振り返ってみたり、時には先生

方と論を戦わせたりして、自分なりに考えを深めることができたような気がします。

そしてもう一つ、そんな私にとっての3年間の最も大きな収穫は、「教師という仕事のすばらしさ」を改めて感じる事ができたこと。教員生活も30年を超え、知らず知らずのうちに小手先の技に頼って日々を切り抜け、「定年まで仕事しないでどこかでやめようか」などという言葉が頭をよぎり始めていた私にとって、この教職大学院で感じた皆様の教育への熱意は衝撃的でした。木曜カンファで自分の悩みを一生懸命に振り返るストレート院生、授業研究会で熱く授業を語り合う拠点校、連携校の先生方、学校現場を支えつつ、本当の教育の在り方を体当たりで探る研究者の皆様、後進を育てようと、日々その組織改革に奔走する大学院スタッフの皆様、こんなにも多くの人々がこんなにも熱心に子どもたちの教育に向かっている姿を目の当たりにして、私は忘れかけていた教師という仕事の重さを改めて実感しました。ここでこうして省察したり蓄積したりすることも大事だけれど、それを直に子どもと一緒に実践してい

く先生という仕事は、やはり何のものにも代え難くすばらしいものです。

私の大好きな尊敬する先生が遺してくださった言葉です。

「我々の真の修養は日常における児童との接触そのものであり、生活の全部が修養であることを信じる。教師はただ一日の仕事にも、全力を傾注して最善をなさねばならない。」

今、私はあと6年しかない自分の教員人生を、できる限り精一杯がんばってみようと思っています。いよいよ、この3年間で蓄積できたことを貢献に変えていくとき。皆様へのご恩返しは、ここから私がどう貢献できるかなのだと思っています。本当にお世話になりました。ありがとうございました。

実践研究福井ラウンドテーブル

福井ラウンドテーブル 2016 Spring Sessions に参加して

スクールリーダー養成コース/坂井市立丸岡南中学校 大黒 康弘

2月27日(土)・28日(日)の2日間、私にとって3回目となる福井ラウンドテーブルに参加した。3回目ということで多少の心の余裕もあったが、初めての本校生徒も発表するポスターセッションと4年ぶりとなる自身2度目の実践報告ということで、少なからず緊張と期待が入り交じっていた。

1日目の午前中はアカデミーホールで行われた Students' Poster Session に、本校生徒も2名参加させていただいた。当日に向けての準備は大変ではあったが、自分たちの取り組んできた活動を振り返る中で、その良さや価値に気付くことができ、取り組んでいく過程にたくさんの学びが散りばめられていると感じた。本校の発表は「教科センター方式とスクエア制および地域と連携した活動」について発表した。2人とも丸岡南中学校の良さを実体験を踏まえて堂々と発表することができ、自信に満ち溢れていた。このポスターセッションで得られた学びや達成感が、今後の学校生活の中での充実感となり、主体的に自分たちで考えて行動できる力も育まれていくと考えられるので、今回から始まった Students' Poster Session の意義は大きいと感じた。

午後からは4つある Zone の中から、ZoneC2「地域と学校はいかに学び合うのか—大人も子どもも育ち合うコミュニティへ—」に参加した。私自身が今年度、丸岡南中学校で「地域と共に生きる生徒の育成」について考える「共々に」部会のチーフを担ってきたこともあり、地域と学校の関係について深めたいという思いがあった。

シンポジウムでは、安居の里を守る会の方からの講演の中の次の言葉が印象に残った。「主催者は、どんな行事でも4～5年続けること。職員等担当が代わっても続けること。必ず実をつけ開花します。」こ

の言葉を聞いて、自分が今チーフを務めている「共々に」部会のことを考えた。地域との連携を考える「共々に」部会は、昨年度までは定期的に行っておらず、今年度から月1回のペースで定期的に行うようになった。生徒が自主的に地域の活動に参加できるようにするための方策を話し合っているが、今年1年間実践してみて、まだ道半ばである。安居の里を守る会の方がお話された地域の行事と同じように、生徒が自主的に地域の活動に参加できるようになるためには、すぐに結果が出るものではなく、長いスパンで地道にやっていくことが大切なんだと感じた。

その後のフォーラムでは4人の小グループで、それぞれの実践報告を行い、それを基に地域と学校の在り方を考えた。その中で公民館主事の方からは、小学生はジュニアリーダーとしても活動しているのでつながりが大きいですが、中学生と公民館の関わりは少ないので、公民館側としても中学校とつないでいきたいという思いであるとのことであった。私自身も中学生が地域の活動に自主的に参加できるよう、地域の方と連携を深めていきたいという思いがあったので、公民館の方の思いと相通じるものがあり、今後は校区の公民館と連絡を取り合い連携することの大切さを強く感じた。この1日目午後の ZoneC2 に参加して、学校と地域が一緒に手をつないで、子どもたちに学校と地域で様々な体験の場を設定してあげることで、自己存在感を与え、共感的な人間関係を育成できるのだと思った。

2日目は4人の小グループで、実践の長い道のりを語ったり、展開を支える営みを聞き合ったりした。私の参加した小グループは、小学校における総合的な学習の実践報告と中学校における地域との連携を考えた実践報告、そして公民館のまちづくりに関す

る実践報告という多様な立場からの報告がなされた。しかし3つの実践に共通して言えるのは、総合的な学習の時間も地域づくりも人づくりが原点にあるように感じた。地域の子どもは学校を含めた地域で育てることが重要であり、その役割を担っている中心が、総合的な学習の時間であり、地域のボランティア活動であり、公民館であるのだと確信した。

自分自身の地域との連携を考えた実践報告後の語り合いの中で、私が一番印象に残っているのは、「地域の問題を生徒と一緒に探していくことから始めること」が、丸岡南中学校の研究サブテーマである、生徒の「やりたい」を喚起する一番の近道ではないかというアドバイスをいただいたことだ。ややもすると

自分自身で、または毎回同じメンバーで話し合っていると、アイディアに行き詰まるときがある。しかし、県内外の様々な立場の方から、それぞれ違った角度からの切り口で、多様なアドバイスをいただくことができるこのラウンドテーブルは、大変貴重な時間であると感じた。2日目の朝にお互い初めて知り合った4人が、午後に入る頃には元々知り合いであった4人であるかのように、熱い議論を交わしていることに不思議な力を発揮させてくれるラウンドテーブルだとも思った。

この2日間の福井ラウンドテーブルで学んだことを、これからの実践や研究に十分に生かしていきたい。

スクールリーダー養成コース／鯖江市豊小学校 上島 雅恵

ラウンドテーブルの心地よさはどこから来るのだろうか。初めて顔を合わせ、初めて言葉を交わす。お互いが抱えているものを知らないからこそ、話せるのだろうか。同じ教育に携わり、教育を語り、直面する問題について、言葉を紡ぎ出すことで、年代、校種、地域を越えて、同僚性が広がっていくのを感じる。ラウンドテーブルが終わる頃は、熱く語り合って満足している自分がある。同僚は、隣の人でなくとも、隣の学校の人でもよい。全国あちらこちらで取り組んでいる仲間の実感をすることで、とても元気をもらえる。明日からの活力と、新たに学び続けようという意欲が増す。

私は、研究主任として、我が校の研究会等を改善してきた。授業研究会や研究部会、現職教育等では、ワークショップ型を取り入れ、充実した会となるよう「対話」を重視してきた。昨年からは始めた実践交流会では、ラウンド型を取り入れ、自分の実践に立ち返り、自己変革につながる場となるようにしてきた。若手の発言が増えたり、研究部会後に自然と拍手が起こったりして、少しずつではあるが、豊小学校の同僚性が培われているのを感じる。どの現場でも、「先生方は、誰もさぼっていないのに、毎年大変になるのはなぜだろう。」と疲労感が増しているのではないだろうか。「自分たちで自分たちの子どもをつくる学校」について語り、チームとして学校の問題を解決していく。教師同士がつながり、支え合う、そんな学校文化をこれからも目指していきたい。

さて、1日目のZone AのSession Iでは、長野県から参加されていた岡谷小学校の発表を拝見した。岡谷市全体に教員の協働を広げられないかと、市をあげてラウンドテーブルに参加されていた。「記録す

る」ということと「教師同士が語り合う」ということを軸に、教師同士がつながり同僚性が高まっているのを感じた。この2年間で私が取り組んできた研究テーマ「教師と子どもの協働の学びを支える」の理想がここにあると感じた。教師が綴る「〇〇日記」というものを見せていただいたが、分厚くびっしり書き込まれていた。発表後、参加者の輪が幾重にもでき、質問が途絶えることなく、時間になってもそこで熱く語り合う教師集団の姿があった。早速ラウンドテーブルの熱気が立ちこめてきた。Session IIIでは、また、同じく岡谷小学校の校長先生と同グループとすることができ、学校の様子をさらに詳しく伺うことができた。岡谷小学校での実践の長い展開を聴くことができ、豊小学校で始まったばかりの協働をしくむシステムを、今後継続発展させていこうという活力をいただくことができた。

Session IIでは、和歌山県の桐蔭高校や長崎大学教育学部附属中学校の発表を拝見した。ともに、中高連携、小中連携に至るまでのご苦労が伺え、校種を越えてつながっていく必要性や改善点がよく理解できた。問題点は、お互いの校種のことをあまり知らないところにある。「歩み寄り」「つながり」「対話」「授業公開」「目指す子ども像の共有」「つけたい力の共有」などがキーワードであった。18才の主権者をどう育てるかという子ども像を共有し、それを、小中高のそれぞれのシステムでどう実現するかという大きな視点をもつ。今後一層校種を越えて協働を図っていくことが大切になってくるだろう。

2日目、自分の実践を含め、3つの実践報告が行われた。長期実践報告を書き上げたばかりで、これまでの2年間の実践の歩みをもう一度とらえ返すよい機

会となった。1年目の2学期が終わる頃には、研究主任としても、国語科教師としても一番行き詰まっていたときだった。実践してみるものうまく行かないことばかりで、もがいていた自分がいた。それが、合同カンファレンスでの院生との省察、毎月のレポートや報告での思考の言語化による省察、理論書の読破、そして、ラウンドテーブルでの全国の優れた実践報告。それらが、全て私の中で少しずつ蓄積され、2年目は、霧が晴れたかのように、うまく研究体制が整っていった。その想いを語る事ができ、そして、じっくり聞いてくれるグループのメンバーがいた。「先生の学びが繰り上がっていく様子がよくわかりますね。」という言葉をいただいた。福島県から教育の復興ビジョンを伝えにいられた推進協議会の事務局長。できたばかりの宇都宮大学教職大学院で奮闘

されている一期生の教員。模擬選挙を小学生相手に実践し3年目になるという早稲田大学の教育学部の学生。実践のストーリーが語られ、その実践の展開をみんなで跡付け、意味を共有していく。その実践の展開を支えるフレームはどれも同じだ。地域を越え、分野を超え、子どもを想う熱い心はみんな同じである。それを共有することで、明日からの現場での大きな活力を得ることができた。

子どもの協働の学びを支えるのは教師である。そして、教師一人ひとりが学びを深め成長するためには、学び合う仲間、学び合う組織が大切だ。これからも、日々実践と省察を行い、現場の先生方と子どもたちと学び合い、共に成長していきたい。ラウンドテーブルは、まさしく実践コミュニティである。

ハリー先生とラウンドテーブルの意義

教職専門性開発コース／福井大学教育地域科学部附属小学校 池田 丈明

今回、私はハリー先生に同行させてもらえる時間を最優先にした。そのため、ラウンドらしいラウンドに参加したのは、最終日の報告会のみであった。しかし、ハリー先生と一緒にいたことで多くの刺激をもらえ、最終日に「学ぶぞ!」という意気込みが湧いたことに感謝している。

そんな最終日、私は朝から駐車場の誘導係をして、急ぎ足で会場へと向かった。そしてテーブルに着席した時、一気に切り替わった。グループナンバーの札が立てられたテーブルでは、M教授、N教諭、T教諭、T学生の4人がいた。その中でも、N教諭の中学校における美術の実践は非常に興味深かった。美術嫌いな子供の意識をどのように変えたのかという実践報告である。それを私なりに次のように要約してみた。

中学では美術を嫌う子供が多いが、内申点に影響しないよう心を隠してどうにか取り組む。子供の頃は皆絵が好きだったのに、いつ嫌いになってしまうの



か?それは学年が上がるにつれ、本物そっくりに描けないことに失望するときである。だからそれを打ち破ろうとこれまで努力して来た。でも成績やカリキュラムの都合で、どうしても子供に口を出してしまい、結果的に子供の嫌いを払拭することができなかった。そんな現状を打破するため、色んな美術関連

のイベントに参加した。その中の一つに、京都造形大学のSさんが始めた『臨床美術』というのに出会った。『臨床美術』とは認知症の予防改善を目的として始められたもの。直感やひらめきなどの非言語を司る右脳と記憶や言語・計算などを司る左脳が脳内にはあり、右脳を大いに刺激することで、左脳の活性を促そうというのがねらい。知った時、初めて「これだ!」と思った。しかし受講に数十万円かかるので躊躇したが、一念発起し藁をもつかむ思いで受講を始めた。それによって一番変わったのは、美術に上手も下手もなく、下手でも褒めるという接し方だった。頭ごなしに「ちゃんと描きなさい!」などと叱るのではなく、まず「がんばって描けたね」と受け止め、次に褒める部分を必ず見つけ伝え、最後にもっと良くなる提案をする。その繰り返しで、徐々に子供が美術を楽しみ始めた。先日、『言葉にならない感情の世界を表現しよう』という取り組みをした。すると子供たちそれぞれの感性が出て、とても面白いステキな作品が多く出来た。評価の部分で課題はあるが、今後もこういう活動をやっていきたい。

このN教諭の報告で私が一番感銘を受けたのは、「受け止め、褒め、提案」という先生なりのスタイルである。自分が生徒だったら、嬉しい。大人であっても、他者にそうしてほしいと思う。先生の実践にもとづくこの方法は、私が現場で行き詰まったときに実践してみようと思う。N教諭はさらに、子供たちの作品の数々を持って来てくれた。作品は、どれも非常に繊細で、豪快で、個性豊かで驚きと感動を宿していた。またその絵から、子供たちの笑顔や真剣な表情

が思い浮かべることができたのは私だけではないだろう。子供が感情のままに自分らしく何かを描くということを、教員になった暁には絶対実践してみようと強く思った。

今回のラウンドテーブルは3回目（初回は一般参加）であるが、なんだかんだと目の前のことをこなすうちに、勝手にラウンドが終わってしまった印象である。しかしながら、学ぶことは非常に多かった。自分の報告では、敢えて両面印刷の紙1枚で臨んだ。その紙には、表はざっくりとした自分の略歴と教職大学院の取り組み、裏は道徳の授業実践と今後の展望という、あまりにシンプルな資料であった。これで1時間の報告はさすがに厳しいかと危惧していたが、全く問題なかった。むしろ、私の道徳の実践に関心を

持ってもらい、「指導案通りにいかないのが道徳の授業」「ワークシートに固執せずすぐに切り替えたのはすばらしい」「君がした実践は失敗ではなく、むしろ成功だ」となんとお褒めの言葉を色んな方から頂いた。これらの言葉は、一重に私の話をしっかり聴いてくださった先生方のお陰であり、この場を提供してくれた福井大学教職大学院の先生方のお陰だと思う。今後も、自分の一回一回の実践と省察を大事にして、同期や先輩後輩や他県他業種の先生方の話から、様々な学びを吸収していきたい。そしてもし失敗して落ち込んでも、彼が言っていたこの言葉を胸に刻んでいればきっと光が見えるだろう。「君には仲間がいる。独りではないのだ。」

長期実践研究報告会

長期実践研究報告会に参加して

スクールリーダー養成コース／福井県立福井東特別支援学校 吉川 輝美

福井大学教職大学院での学びを修了される先生方の報告を聞く機会をいただきました。来年の今頃は、私たち1年生組が報告しているのだなと思いつつながら大学に向かいました。先生方の2年間の足跡が記された厚い報告書を手にしたとき、とても崇高なものに感じたと同様に、果たして自分は先輩方のように書き残せるのだろうかと不安にもなりました。

ストレートマスターの田村先生は、「等身大 — “空想上の” 教師ではなく、自分らしさを出す “等身大の” 教師として —」というテーマのもと、「自分が教師としてやっていけるのか」、「教師に向いているのだろうか」と授業や生徒との関わりの中で問い続けた2年間を綴っておられました。先生は「教師は完璧でなければならない。品行方正でなければならない。」という理想をもち、立派な教師を目指したいと思っておられると聞き、20数年前の私はどうだったのだろうかと振り返ってみました。「どうして教師になりたいの？」と聞かれると「子どもたちと喜んだり、笑ったりしたい。」という一言で、田村先生のように深く教師という職を考えてはいなかったように思います。先生の真面目さ、教師としての在り方探しをしていらっしゃる姿はまぶしく感じました。先生の良さが生徒に伝わっているからこそ、「話したい、聞いてほしい」と訪ねて来る生徒がいるのでしょうか。目の前にいる子どもたちにどう寄り添い、何を大事にしていくかを見極める目を育てていくことが教師として大切なように思います。先生の報告を聞きながら、教師として歩み出した頃のことを思い出し、自分はどうのような教師でありたいのかを問い直すきっかけとなりました。先生は、春から地元に戻り高校で指導にあたられると聞きました。悩んだときはここでの学び、出会いを思い出してくださいね。

スクールリーダーコースの平林先生は、「関係性の中から育つ実践的指導力 省察を通して同僚や子供たちと共に探求し未来を創造する」というテーマのもと、新採用時代から現在に至るまでの自分の歩みを綴っておられました。先生は、チャレンジ精神旺盛な活動的な人。良いものと聞けば研修に出掛けたり、書物を購入して実践したりと熱心な姿に私自身、恥ずかしくなりました。教師になってからの私は、県内の特別支援教育に関する研修講座には参加しても、県外まで出向いて行くことはありませんでした。本を買っても、自分の今困っていることが記述されているところだけを読んで、全部読破するという時間はもっていませんでした。探せば時間はあったと思うのですが、仕事、家庭、子育てに追われた毎日の中

にはなかなか本を読み切るまでの余裕と時間は十分にもてませんでした。先生の報告を聞きながら、これからはもっと積極的にいろいろな学びの場に出掛け、教師としての資質を高めなければならないと考えさせられました。先生は、「自分のやりたい、これはこうした方がいい」と思ったことをとことん追求して実践されてきています。その中では、誰にも迷惑を掛けずに自分一人でやるという思いから孤立感を感じることもあったようです。しかし、先生の大きな取組であった環境教育をとおして、勝山の自然を子どもたちと探求し、専門家から学ぶ中で自分がいろいろと変化していった姿が記されており、話を聞いていて興味をもちました。尊敬できる大きな存在であった専門家が去る事件が起き途方に暮れる中、「学び

合い、協働」を掲げ、理解のある同僚に支えられながら、少しずつ前を向き始めた先生の心の葛藤が読み取れました。困ったときに助けてくれるのはやはり同僚。困ったときに自分からSOSを求め、いろいろな経験をもつ同僚から学び、語り合う中で答えを探し、実践していく姿勢が大切だと再確認できました。

さて、来年の今頃、自分は何を語っているのだろうか。この1年を振り返ってみると、私の心は不安、迷い、期待、感謝…というように揺れに揺れた1年でした。でも、この揺れは自分を成長させる前向きな揺れだと捉えられるようになってきました。修了される先生方と出会い、語り合えた時間は私の支えとなりました。先輩方の実践を見習い、新たな1年に向けて頑張っていきたいと思います。

『先生。私、頑張りましたよ！』

教職専門性開発コース／福井市至民中学校 高田 侑来

長期実践報告会前日（2月12日）の夜、私は大学院の印刷室にいました。明日の報告会にて使用する、書き上げた長期実践報告書を印刷するためです。コピー機から出てくる刷り上がったばかりの報告書を見て、小さくこう呟きました。「先生、なんとか出来上がりましたよ。あとは泣かずに、報告できるかですね。」

去る2月6日、尊敬する二宮秀夫先生が急逝されました。2年間毎週のように先生にお会いし言葉を交わしていた私たちSM（ストレートマスター）は、その知らせに頭を殴られたような衝撃を受け、同時に言葉にできない悲しみが襲いました。担当教員が二宮先生であり、また自他共に、そして先生ご本人公認の「二宮っ子」だった私は、心が張り裂けそうな辛さに耐えきれず、ただただ涙を流すことしかできませんでした。

長期実践報告書の第一締め切りは2月1日。ですから提出してから報告会まで、多少時間がありました。その間、私たちSM2は書いた文章の校正をし、最後の仕上げをします。院生室にて仲間と言葉を交わしながら取り組もうと試みるのですが、どうも気が進みません。自分の2年間の歩みを文字にした物を読み直さなければいけないが、どうしても読み返すことができないのです。それぐらい、私の報告書には二宮先生との思い出が詰まっていました。しかし、仲間同士で声を掛け合い支え合い、そして大学院の先生方のケアによってどうにか印刷までこぎつけました。それが冒頭に書いた、あの長期実践報告書です。後は報告会にて泣かずに報告するだけです。

報告会当日は、2月の半ばですが春の陽気すら感じられる温かな日でした。コラボレーションホールに集まった私たちは、グループに分かれて報告をします。私の班のメンバーは偶然にも先生同士つながりがあったため、お互いの実践を聞き合い、受け止め合える空気が始まる前から出来ていました。席に座って先生方のお顔見た瞬間、緊張がとけたのを覚えています。極めつけはもう一人の報告者である山田俊行先生のお言葉です。私が話し始める前に「高田さん、今日はね、思う存分話せばいいんだよ。」とおっしゃってくださいました。その声がとても優しく、温かいものだったため「話したいこと、心の中に溜まっている想いを、できるだけ聞いてくださる皆さんに伝えよう。」と気持ちを切り替えることが出来ました。

結局、泣かない！と心に決めていたのですが、やはり涙腺は緩んでしまいました。特に杉山先生のお言葉が、今も心に残っています。「高田さんの実践は、二宮先生がおっしゃった『自分の力で人の力を借りる、それも自分の力』という言葉で言い表すことができますよね。多くの人の力（言葉）を自分の力に変えてきた。それは高田さんにしかできないことだったと思うんですよ。」杉山先生も私の実践に常に寄り添ってくださった先生の一人です。お二人の先生の言葉がリンクしたとき、私の琴線にふれたのでした。

私の心は、未だ深い悲しみの中にいます。前を向いて歩きだすには、もう少し時間がかかりそうです。ですが自分の実践を語ることは、同時に私が2年間で得た周りの人の言葉・考え・想いを伝え広めることだ

と思いました。思い出を語るだけでなく、希少な経験・いただいた言葉や想いを聞き手の皆さんにぜひとも紹介したい。そう思えば辛い気持ちに耐えながらではなく、ほんの少し前向きな気持ちで語ることができる。今回の実践報告で、深く実感することができました。

報告会を終えた今、二宮先生に今回のことをご報告したいと思います。

「先生。私、頑張りましたよ！先生が最後まで面倒見てくださいました報告書は、多くの人々のサポートのお

かげで完成させることが出来ました。報告会では最後、泣いてしまいましたが、そこは許してくださいね。福井ラウンドテーブルでは、もっともっと思いを込めてみなさんにお話ししたいと思います。見守っていてくださいね。」

優しい二宮先生のことです。先生はきっと、こう返して下さるに違いありません。

『高田さん、よかったよ。頑張ったの。次も、これから先も、頑張るな。』

冬の集中講座

街 灯

教職専門性開発コース／福井市中藤小学校 藤田 芳幸

暖冬と呼ばれ、雪が全く見られないまま冬休みに入り、冬の集中が始まった。師走も末で、一年を振り返ってしまいう時期であるとも言える。ストレートの院生はインターンの熱気も忘れる間もなく、リーダーの先生は仕事を忘れる間もなく、共に学びを深めていった。

インターン先に勤め始め、9か月が過ぎようとしていた。実践の記録を振り返ると、そこには自分がやろうとしていた足跡がしっかりと残っていた。道は残っているのだが、その周りに何があったのかを見てこなかった。道が無ければ、照らされることがなかった風景を、この冬の集中で照らし出すための振り返りを行う。

夏の集中での振り返りを読み返す。五か月ぶりに自分に出会う自分がそこにはいた。ただひたすらに、自分の行動、考えたことが記録されていた。もはや、記録という以前に日記に近いものであった。「ああ、あったな。こういうことも。」というような感想しか持てない記録。そこに意味は見出せない。このような記録からの脱却を目指そうとした。

毎日、インターン後に院生室に集って、自らの実践を記録していた。集中の初日、柳澤先生がおっしゃっていた「編む」という言葉を借りると、自分の実践を「紡ぎ出す」というところから始める。得体の知れない、ただ絡まっただけの記録である。毎日の記録を「教師」「子ども」「クラス」の三つの学級を構成する素材ごとで、「より」合わせる。すると、それぞれの繊維が絡み合いながら、糸になっていくように見

えてきた。絡み合うところには意味があった。それは、それぞれが成長する時に起きる情動の揺れがあり、情動は互いに関わり合う時に起きている。自分がどういった時に、関わり合おうとしているのかが分かってくる。子どもとの関わり合いは、「子どもと子ども」の関係のところへ関わろうとしていた。集中の最終日、宮下先生には「アクセス」という言葉をいただいて、しっくりときた。つまり、子どもの中の関係性、そこに存在するだけでなく、積極的に向かい、関係性を整えようとしていたのだ。また、子どもと子どもだけでなく、「子どもと教材」「子どもと学習環境」をどう繋げるか等といった実践も行っていた。

自分にとって「冬の集中」とは、過去を振り返ることを行いながら、未来を見据えるような時間であった。たった9ヶ月の歴史ではあるが、確実に踏み進めてきた道が確実に自分を歩み進めていく。前を見ると、真っ暗な道に街灯がポツリポツリと立っている。その街灯まで、落とし穴があるかもしれないし、危険な犬がいるかもしれない。しかし、行くべき道は見てきたのだ。年末年始ということもあり、実家に戻り、小休止をいただいてインターンに戻っていく。その時の自分の姿は、集中を受ける前の自分とは一味変わっていて、子どもとの関わりもまた、12月とは違って関わっている。無意識を意識の下に照らし出すだけで、人間は深まっていくのだと感じた。自分のために、子どものためにまたインターンに向かって行く。

インターンシップ／週間カンファレンス報告

教職専門性開発コース／福井市中藤小学校 山田 芳裕

諸先輩方の長期実践報告書の執筆も一段落し、院生室はその時とは打って変わって静まり返っている。あの賑やかな雰囲気を思い出すと、少し寂しい気持ちも押し寄せてくる中、今こうしてパソコンと向かい合っている。2016年を迎え、早くも1ヶ月半を経とうとしている。「光陰矢の如し」とはまさにこのことだろう。言ってしまうと、つい最近教職大学院の門を叩き、インターンシップが始まったことが、つい昨日の日のように思い出される。「このペースで月日が経つと…」と考えてしまうが、目の前の現実から逃げないためにも、今回考えることは止めようと思う。

私は現在、中藤小学校でインターンシップをさせて頂いている。担当学年が6年生ということで、卒業の日が刻一刻と迫ってきている。残す所、彼らが中藤小へ登校する日は30日を切った。その中でも私達ストレートマスターの院生は、現職の先生方の5分の3(週に3回)の日数しか学校に来ることが出来ない。そのため子ども達と関わる時間は、本当に限られたものとなってきた。授業中や休み時間に、何気なく関わる日々こそ大切に過ごさなければならない。「何か子ども達に残せるものはないか。」この問いが私の中をぐるぐると駆け巡っている。卒業を目前とした子ども達に何かしてあげたい…、気持ちがあっても上手く行動に移すことができない…。今の自分にできることって一体何だ!?!。悩みが尽きない日々が続いた。

もどかしい気持ちになっていた時、いつも私を助けてくれるのが、週に1度行われる木曜カンファレンス(通称木カン)である。ここでは1週間のインターンシップでの悩みを共有し、先生方や院生の皆さんに意見をもらうことができる。私もこの機会を逃さず、先に述べた悩みを打ち明けことにした。すると、様々な意見を頂くことができた。例えば、「あと30日を切ったと考えると、できることも制約されてしまう。指導するための目線の期間を『卒業』ではなく、『中学校』、『高校』、『成人になったら』などに伸ばす。そうすることで、今すぐに何かが変わる訳ではなくとも、行動することができるのではないか。また、せめて卒業までにこうなって欲しいと思うビジョンを直接子ども自身に伝えることも一つの手だよ。」「山田くん自身が子どもの良い所を見つけて、

伝えてあげるっていうのはどう?やっぱり見てくれているという気持ちや、認められたという気持ちは子どもの中には残るからね。こっちからしたら何気ないことでも、子どもにとって見れば大きなことになるかもしれないよ。」などの意見であった。私には考えも付かない意見を言ってくれるカンファレンスの場合は、私がインターンシップを行う上で本当に大きな助けになっている。今回は特に、「長期的なスパンを持ち、卒業までにどうなって欲しいかを伝える」とこと、「良い行い、言葉かけを広い、どんどん子どもに返していく」とことに重点を置いて、インターンシップを行うことにしたい。普段から、このカンファレンスを経て、来週からどのようにインターンシップを過ごすかを項目立てするようにしている。毎日意味のあるものにしたいという思いがあるからである。これからも気負わず、継続していきたい。

木曜カンファレンスでは、午後の時間を使って、ストレートM2は公教育、M1は大学生版PISAのポスター作成に取り組んでいる。ラウンドテーブルでの発表も控えているため、全員が知恵を出し合い進めることができていく。今回我々は、「グローバル化」、「福祉」、「地方創生」の3つの観点をグループごとで検討した。PISAの問題を作成し、それを実際に解答する中で、評価基準の設定や、重要とする観点を導き出している。取りかかった最初の頃は、何をどうして良いのか分からず、戸惑うことも多々あった。しかし同期の院生と協働する中で、徐々に要領を掴み、軌道に乗っている。私は「地方創生」を担当しており、HPや文献を当たる中で、これまでほとんどなかった地方創生の知見を広げることができた。また、それに伴って関連している国・地方・人など様々な箇所にも焦点を当てて検討するおとで、更に学びを深くすることができた。作成の時間は厳しく、決して楽なものではなかったが、カンファレンスを通してPISAに関わることが出来たことに嬉しく思う。

今年度もあとわずかとなった。残された時間をどれだけ有意義なものにできるかは、自分次第である。この1年があつという間だったことを忘れず、来年度は一日一日を大切にしながら前進していきたい。これを書いている最中、関東で春一番のニュースを耳にした。春の訪れは、もうそこまで来ている。

研究集会・公開研究会などの報告

カリタス学園 公開授業・保育参観と研究会

福井大学教職大学院 教授 森 透

少し前になってしまったが、1月25日(月)カリタス学園・附属小学校の公開授業と研究会、26日(火)カリタス附属幼稚園の保育参観と研究会に参加してきた。参加者は松木健一・山崎智子・稲井智義、石井恭子の先生方と私の5名。昨年4月から拠点校になったカリタス学園であるが、遠方のため日常的には十分参加できないゆえ、年度末の貴重な研究会に参加できてよかったという思いであった。

小学校は4年の国語の授業であった。担任の先生は算数を専門とされているとのことであるが、今回は国語にチャレンジされていた。授業はペアで議論しながら進んでいった。

研究会は、いくつかのグループに分かれて行うワークショップ型授業研究会。それぞれが付箋紙に思ったことを書き模造紙に貼っていく。貼りながら、自分の感想を紹介し、グループのメンバーと共有していく。終了後は、一人が残って、他のメンバーは移動しつつ他のグループの模造紙を見て歩く。各グループに残った一人がグループでの議論を紹介する。参観者は自分のグループでの議論と比較しながら、共通点や違いを認識していく。このようなワークショップ形式の丁寧なグループ議論の共有化は非常に大事だと思う。一般的にはグループ討論の共有化は、グループの代表が口頭で模造紙を示しながら報告するのであるが、カリタスの場合は、じっくりと一人が議論のプロセスを紹介し、参観者は模造紙を見ながら議論のプロセスを認識する。このような授業研究会は他の学校ではあまり見られないと思う。最後は、幼稚園の参観者からの一言と松木先生のプレゼンがあった。松木先生のプレゼンはいつも感心する内容である(超多忙な中で、いつあのプレゼンを作成しているのであろうかと率直に思う)。

夜は登戸駅の近くの店での懇親会。小学校の先生方との酒を酌み交わしての懇談で、本当に楽しい時を過ごすことができた。カリタスの先生方に感謝したい。夜は立川駅近くのホテルに泊まり、翌日は幼稚園の保育と研究会に参加した。

午前中は幼稚園の様子を参観した。カリタス幼稚園の参観は2度目であるが、園庭で元気に遊ぶ子ども

たちをみて、やはり子どもはどこも同じだと感じた。私は現在福井大学附属幼稚園の園長をしている関係で、少し感じたことを述べたいと思う。全体的にキリスト教の思想が基盤にあるからか、先生方が子どもたちに対して非常に温かく丁寧な言葉遣いと関わりをしていることだ。話す言葉も上品で包容力豊かな温かい感じであった。園庭は、福井よりも少し小さいが、丁度真ん中に先日降った雪が残っており、子どもたちはその雪をバケツに詰め込んで楽しく遊んでいた。追いかけてごっこは子どもたちが大好きな遊びであり、あちらこちらで子ども同士が追いかけて回っていたように思う。動物の園舎ではウサギを飼っていたと思うが、複数の子も子どもたちが丁寧に掃除をしていた。縄とびも得意な子どもたちがチャレンジしていた。福井では、築山があり、お店屋さんごっこや砂場で水を引いて遊んだり、サッカー、色水遊びなどを行っているが、カリタスは園庭を思う存分活用して遊んでいたように思う。ホールでもマットや鉄棒で思いっきり身体を使った運動をしていた。運動の指導者の男の先生が温かく指導されていた。

午後は研究会であった。小学校からもかなりの人数の先生方が熱心に討議に参加されていた。最初は3つのグループに分かれて、それぞれが見た子どもの姿を付箋紙に書き込み、模造紙に貼り付けていった。このやり方は、基本的に小学校と同じで、カリタスでは小学校がある意味先進的に授業研究を始めたと考えられ、そのやり方が幼稚園や中・高校にも普及しているのではないかと推察される。モンテッソーリ教育がカリタス幼稚園の教育理念であるが、そこでの学びや経験が、幼稚園での他の遊びや経験とどのように結びつき、成長・発達をしていくのだろうか。福井では昔モンテッソーリ教育を実践していたようであるが、好きな遊びを思いっきり経験することで、子どもたちは成長していくと思う。カリタス幼稚園が今後、小学校から中・高校と子どもたちが連続して学び成長する姿をみたいと思う。今回も授業や研究会にカリタス学園の先生方がお互いに参加し合う文化・土壌ができつつあると感じた。ますます、カリタス学園全体の発展を期待したいと思う。

伊那市立伊那小学校 平成 27 年度公開学習指導研究会

福井大学教職大学院 教授 森 透

2月6日(土)の長野県伊那市立伊那小学校の公開研究集会に今年も参加できたことを嬉しく思う。今回も学部の後期授業「教科生活基礎」を受講した、主に1年生が27名、教職大学院院生が12名、教員が2名の合計41名が参加した。

大型バス1台で前夜の10時に福井大学を出発し午前2時頃に駒ヶ岳サービスエリアで休憩・睡眠、午前6時起床、洗面・食事のあと、7時に出発。伊那小学校に8時前に到着。受付を済まして、それぞれが自由参観授業、共同参観授業を見て歩いた。私は自由参観授業は自由に全部の授業を少しずつ見て歩いた。特に、2年生の「“こわかわいい”おばけやしきをつくろう」は、部屋に段ボールが一杯で、いかにも「おばけやしき」という感じの雰囲気であった。担任の先生の話では、昨年の1年生からお化け屋敷づくりに没頭して、2年生になっても飽きることもなく、熱心に取り組んでいるとのことであった。子どもたちのエネルギーはすごいなあと感じた。

共同参観授業は、2年生の「くうちゃんといっしょ」に参加した。クラスのみんなで羊のくうちゃんの体重を量り、小屋の手入れを熱心にする子どもたち。本当にくうちゃんが大好きで大事に育てていることがよく伝わってきた。分科会では、担任の太田先生が「私は動物が苦手です」と正直に率直に語っておられ

たのが印象的であった。伊那小は動物を飼う実践が多い。生き物の飼育は難しいが、しかし予想を超える可能性や展開が生き物にはあると思う。動物が苦手な太田先生が子どもたちと一緒に試行錯誤しながら、世話をしながら、だんだんと動物に気持ちが近づいていく様子が推察できた。

学習発表は3年生の魚のフナの実践と5年生の焼きものの実践であった。毎回思うが、本当に子どもたちは劇づくりを通して、自分達の活動を表現することが上手である。最後の講演会は信濃教育会会長の後藤先生の「教育の出発点のおきどころ」と題するものであった。信濃教育会は歴史的に長野県の教育を支えてきた団体であり、特に総合学習や豊かな教育実践を大事にして来た歴史がある。伊那小の講演者に信濃教育会の方が来られたのは初めてではないかと考えられる。

帰りのバスの中で、一人一人に感想を語ってもらった。マイクを通して学生や院生の率直な感想を聞いて大変よかったと思う。高速道路での事故で3時間もストップしたことによって、大学に到着したのが午前0時を回ってしまった。学生・院生・教員41名が無事に帰れたことがよかったと思う。「添乗員」としては満足な伊那小ツアーであった。来年以降も継続できればと期待している。

伊那小学校公開学習指導研究会 1年謹組から学んだこと

スクールリーダー養成コース／小浜市立口名田小学校 正木 啓敬

はじめに

平成28年2月6日(土)、長野県伊那市立伊那小学校の公開学習指導研究会に、初めて参加させていただきました。

参加の理由は、教職大学院の夏季集中講座で、伊那小学校の実践記録に記されていた「理論の芯は実践」という言葉に出会ったからです。この言葉には、「授業という複雑で一つとして同じものはないものの中から、どう取り組んでも『このやり方なら上手くいく』という普遍的原則はない。(中略)さらに、教師一人一人の経験を集約し、その経験を読み込み、意味を問い直すことでしか授業の方法は生まれてこない。」という意味が込められていました。理論と実践の往還から授業が生まれると考えていた私にとって、とて

も印象深い言葉でした。それ以後、機会があれば伊那小学校に訪問したいと考えるようになりました。今回の公開学習指導研究会での学びは、私の授業に対する考え方を根元から問い直す程、大きなものになりました。

1. 子どもの姿

「ふわふわだよ。」

と、つぶきながらヤギの毛をなでて、生命を感じる1年謹組の子どもたち。言葉にしなくても、優しさ、思いやり、人として大切なこと全てを、ヤギのちょこくん・ふわりちゃんと触れ合う中で学んでいました。そして、1年謹組の子どもたちを、あたたかい眼差しで見守る担任の小田切亮先生。子どもの思いが、つぶきや仕草になって表れた時、

「ねえ、みんな聴いてくれる。この〇〇、どう思う。」と、体験から生まれた気づきを子どもに返し、深い学びへと誘っていました。子どもの思いが何かに出会って形になった時、それを学びに結び付けていく小田切先生と、プールの水が凍る寒さの中、ちょこくん・ふわりちゃんと自分の思いを重ね合わせて語り、相槌を打ちながら友達の話聴き入る子どもたちを見て、伊那小学校で大切にされている「子どもの事実から出発する」という理念を垣間見たような気がしました。

2. 教師の姿

「どうやって、体験活動を計画するのですか。」と、自由参観後に小田切先生に質問しました。すると、「好きなものを選ぶよ。」

と、拍子抜けするほど簡単な答えが返ってきました。教師も好きなものなら、子どもも好きになり、そして、学びが深まるということは当たり前のこと。続けて、「子どもたちが、ヤギの写真を送って来たんですよ。こんな写真を見たら、ヤギのことが好きになっちゃいますよね。」

と、嬉しそうに携帯の画面を見せながら教えて下さいました。初めは、ヤギを飼うつもりはなく、「学び手」である子どもの求めに寄り添った結果、ヤギに決定したそうです。結果的に、材の持つ「本物の力」が子どもの発意を呼び起こし、教師を変え、深い学びを生み出すことになりました。

お話を伺いながら、小田切先生が、一人一人の子どもに対して心を通わせること、そして、子どもの心の動きを読み解こうとする営みを、日々、丁寧に積み重ねておられると感じました。きっと、1年謹組の子どもたちは、小田切先生のそうした心もちを感じ取って心を開き、教師に素直に思いを伝え、学んでいるのだと思いました。1年謹組の、子どもと教師・ヤギがそれぞれに関わり合いながら深めていく学びの様子が、目に浮かんで来るようでした。

3. 学力との関係

「体験を本当に充実してやった子どもの学力は高い。本当でしょうか。」

と、午後の研修協議の場で、質問しました。数名の先生方から、

「体験活動での子どものつぶやきや仕草などを看取り、教室に戻ってからの教科の学習課題に結びつけています。」

と、教えて頂きました。伊那小学校では、はじめに学習内容があるのではなく、子どもの求めや願いから出発して学んだことが、国語の学習であったり、算数の教科内容であったりします。つまり、子どものあり

のままの姿から学びを始めることで、子どもが目を輝かせるような深い学びを生むことができるのです。そのために、子ども以上に教師は、深く学んでおかなければなりません。研修協議でも、子どもの半歩先を歩むため、先生方が、懸命に学んでおられることが、言葉の端々から感じられ、身の引き締まる思いがしました。

4. 遊びとの関係

2月末に行われた福井ラウンドテーブルで、小田切先生とお会いしました。その時、

「子どもが、ヤギの前と後の足の太さの違いに気づいたことから学習が始まりましたよ。」

と、1年謹組のその後の学びを話してくれました。足の太さから、頭、目、そして、歯に子どもたちの興味関心が広がり、国語科「くちばし」の深い読み取りにつながっていったそうです。さらに、ヤギの餌を取るために土手に青草を取りに出かけると、子どもたちが駆けっこをしたり、飛びまわったり、遊びか遊びか区別できなくなる様子を、嬉々として話してくださいました。

灰色熊の生態を研究しているボブ・フェイガンは次のように述べています。

「世界は絶えず変化し、未知の課題や不確実な状況を突き付けます。遊びは、そうした変化への対応力を生むのです。」

子どもたちが遊んでいる時、最も純粋な私たちで子どもらしさを発揮し、自分らしさをさらけ出します。遊びは、子どもたちの発想を豊かにしてくれます。好奇心が刺激され、未知のものを知りたいという意欲が湧いてきます。私が見聞きした伊那小学校の子どもたちは、遊びと学びを行き来しながら、創造性をはじめとする、生きていく上でなくてはならない力を育てていました。

教育学者の木下竹次(1872~1946 福井県出身)は、「生きることは生きることによってのみ学習せねばならぬ。」と、「学習原論」の中で述べています。伊那小学校には、子ども本来の姿に寄り添った学びが息づいているように思いました。

まとめ

このような貴重な学びを与えて頂いた福井大学教職大学院 森 透 教授をはじめスタッフの皆さま、本当に、ありがとうございます。少しでも勤務校の子どもたちに、今回の学びを還元していきたいと思っています。そして、機会があれば、再び、伊那小学校公開学習指導研究会に参加させて頂きたいと思えます。

夢へのヒント

教職専門性開発コース／坂井市立丸岡南中学校 山田 晃大

私には夢がある。学部生のときに経験した、数学の一つの問題に対してじっくりと考え「もうダメかもしれない」と思ったあとにハッと解への方策に気づくときの喜びを、いつか、自分の生徒に感じさせてあげたいのだ。「ぜひそれを伝えてあげてください」という理学部数学科での恩師の言葉がその気持ちを薄れさせずにいる。だからだろうか、この度の伊那小学校 公開学習指導研究会に参加して、「これを数学でやりたい」と心から思った。そうここに、夢へのヒントがある気がしたのだ。

私が参観した自由参観の授業では、生徒たちがクラスで育ててきたヤギの今後の飼い方についてじっくりと考えられる時間をとる教師の姿があった。こういった場面で教師は、生徒が十分に思考を巡らせていないような早い段階で、答えを与えてしまいがちだ。私も、インターンシップ先の授業実践で、そういった知識や技能の習得を念頭に置いた指導を行っている。ではなぜこの自由参観の授業での教師の姿は違ったのだろうか。

その答えは、授業後の研究発表の中にあった。伊那小学校は研究主題に「内から育つ」を掲げている。「生徒は自身で成長できる力を持っている」ということを、教師が信じているのだ。だからこそ教師は、生徒が自分たちで課題解決していけるように、じっくりと考えられる時間をとっていたのだ。

また研究発表では、「思いがけない出来事」をキーワードに伊那小学校の実践の紹介を行っていた。どの学級の実践にも「思いがけない出来事」が存在し、それが生徒の歩みに欠かせないものとなっていることに気付かされた。これを知り私は、自分が夢見ている「生徒に伝えたい喜び」とは、これなのかもしれないと思った。つまり、数学における「思いがけない出来事」を伝えることが、私の夢の正体のような気がしたのだ。

共同参観の授業では、生徒たちが自分で作った凧をより良く上げようと試行錯誤しているという姿があった。生徒は、凧の上がり方を自分の目や指先の感覚で確認し、より良くするための方策を考えるという活動を行っており、その没頭ぶりに驚かされた。この生徒の学びの姿は“本物の学び”をしている姿である気がした。つまりその姿が“理想的な学びの姿”に

見えたのだ。そしてその様子は、福井大学附属中学校での生徒たちの学びの姿に似ていた。

少し話がずれるが、“アクティブラーニング”についての話をしたい。“アクティブラーニング”という言葉は人々に異なったイメージを与える。それは、その言葉自体に明確な定義が存在しないからである。「これが定義だ」という人がいた場合それは嘘である。結局はその人にとっての“理想的な学びの姿”を言語化したものに過ぎない。“アクティブラーニング”という言葉は、人々にとっての“理想的な学びの姿”を表出させるためのきっかけに過ぎないのだ。こういった視点に立ったとき、伊那小学校での実践は「内からの育ち」という“理想的な学びの姿”の一例であり、福井大学附属中学校での実践（特に数学科において）は「関係を探り構造をつかむ」という“理想的な学びの姿”の一例であると言うことができる。では私にとっての“理想的な学びの姿”とはどのようなものなのだろう。それを言葉にすることこそ夢に近づくことであり、そのためのヒントは私の近くにあった。伊那小学校の助言者の先生方の中には私の恩師がおり、福井大学附属中学校はうちの大学院の拠点校である。

しかしながら、“アクティブラーニング”を語るときには注意が必要だ。それはついつい話が理論的になりすぎてしまい、それによってどのような育ちが生まれるのかという本来ではとても重要な項目から話がそれてしまうのだ。私が伊那小学校で参観した授業や実践報告からは、生徒の勤労感や思いやる心、集中力の伸びしろを感じ取ることができた。生徒の育ちという視点に立った場合、従来型の知識や技能の習得を念頭に置いた指導も重要だ。しかし、それだけではいけなくなっていることも事実だ。私が数学でこそ育てたい力は「論理的な思考力や表現力、直観力」である。とはいえ、この考えと私の夢との関連性については、まだ私の中での整理がついていない。

私ごとだが、年度末に書くインターンシップ報告書のタイトルは『探し続ける教師 1年目』にしようと考えている。我ながら、自分がやりたい教育とは何なのかを探し続ける旅の、第一歩が切れている気がする。今回の伊那小学校 公開学習指導研究会への参加は、私の探し続ける旅の重要な1ページになった。来年も参加したい。

宇都宮大学 宇大教育実践フォーラム

2016年2月13日(土)に「宇大教育実践フォーラム」が宇都宮大学にて行われた。プログラムは、第1部「教職大学院教育実践研究プロジェクト発表会」、第2部「教育実践について語り合うラウンドテーブル」であった。第1部では、まず教職大学院院生15名(すべてM1)による九つのプロジェクトの研究経過・成果が報告された。つづいて静岡大学の益川弘如氏が講評し、各プロジェクトで定量的・定性的にデータを挙げている点を評価された。第2部では、院生一人を含む5・6名ずつのグループ(当日は十四グルー

福井大学教職大学院 特命助教 稲井智義

ブ)に分かれて、院生ともう一人の参加者が報告した。その後の全体会では東京学芸大学の成田喜一郎氏が話題提供し、実践と理論の架橋・往還だけでなく理論の下にさらに哲学があることを、ラウンドテーブルに参加する中で感じたという話をされた。なお成田氏の発表内容は、林泰成他編『教員養成を哲学する』(東信堂、2014年)の論文をさらに発展したものと筆者には感じられ、また東京学芸大学の研究紀要に発表するとのことであった。

板橋区立中台中学校 平成27年度研究実践報告会

去る2月29日(月)午後に東京都板橋区立中台中学校が平成27年度の研究実践報告会を開催され、担当者である私と半原先生、綾城先生の3名で参加した。同じ日に、福井から上海に訪問団が出発したが、私と半原先生は翌日に上海に合流するという忙しいスケジュールの中での参加であった。教科センター方式を実施する中台中学校の新しい校舎が4月に落成する直前であったが、授業は今までのプレハブ校舎で行われた。生徒や先生方はいよいよ4月から新たな校舎と授業が始めるという活気あふれる中での公開研究集会であった。中台中学校は4つの研究指定を受けている学校である。つまり、①平成26年度・27年度いたばし教育ビジョン研究奨励校、②平成26年度～平成30年度指導力向上研究推進校、③平成27年度板橋区アドバンススクール、④平成27年度・28年度パナソニック教育財団特別研究指定校、の4つである。大きな期待を背景にして実践をされてきていることがよく伝わってきたが、先生方と生徒たちは日常の実践にじっくりと取り組み、自分たちのペースで学びを深めてきていることを感じる事ができた。

私は公開授業はスクールリーダーの星野先生の理科の授業を参観した。3年B組36名のクラスで、単元名は「科学技術と人間、自然と人間」、単元目標は「エネルギー資源の利用や科学技術の発展と人間生活とのかかわりについて認識を深め、自然環境の保全と科学技術の在り方について科学的に考察し判断する態度を養う」であった。生徒たちはグループで調査・探究してきたことをポスター発表する2回目であ

福井大学教職大学院 教授 森 透

った。声が少し小さいグループもあったが、自分たちが考えた地球温暖化の問題や節電、酸性雨の問題など、身近なテーマを自分たちの日常生活にまでおりて発表している姿が印象的であった。人間と自然のテーマは壮大であり、今後の地球と人間社会を大きく規定する内容であるが、日常の視点から考えようとしていることに共感を持った。

最後のシンポジウムは「生徒の主體的な学びを重視した授業の工夫・改善」をテーマとして、田中洋一先生(東京女子体育大学・東京女子体育短期大学)、吉崎静夫先生(日本女子大学)、栗原健先生(板橋区教育委員会事務局指導室長)、北村康子校長、私の5名で行われた。時間が限られていたが、私が強調したことは、先生方も実践記録を書いてほしいということであった。多忙な先生方であるゆえに様々な課題に振り回されてしまう現実があるかもしれないが、福井大学の教職大学院で行っている自らの実践を省察すること、多忙な中での実践を改めて整理し振り返り意味づけることの重要性を改めて強調させていただいた。今後、中台中学校の実践記録集(研究紀要)が発行されることを期待しつつ、4月からの新校舎での教科センター方式の授業実践があせらずにじっくりと展開されることを切に願っている。



福井大学教職大学院 「学校改革実践研究報告」目録(平成 27 年度分)		
NO.	名前	タイトル(主タイトルのみ)
237	北川 優佳	生徒の成長を支援する環境づくり
238	高田 侑来	一人の‘自律’した教師を目指して
239	高橋 聡志	学習環境を創造する
240	田中 紗衣里	なぜ家庭科を学ぶのか
241	田村 朋久	等身大
242	田村 佳子	その子たちの音楽がはじまるとき
243	藤井 真衣	繋がり合う学習を目指して
244	吉田 智保	子どもたちの「つながる力」を育てる教師を目指して
245	上島 雅恵	子どもをコーディネートする, 教師をコーディネートする
246	大村 正一	授業改革を目指す教師集団の一員として
247	金子 奨	1990年代高校改革と教職アイデンティティの変様
248	小林 英典	学校力を高めるチーム力
249	砂原 亘	「生きる力」を育むための授業観と研究観の相互変容
250	墨谷 幸	可能性への挑戦
251	眺野 大輔	これからの高校の在り方を模索して
252	柘植 泰子	校内研究をめざして
253	平林 茂将	教育観の変遷
254	星野 聡徳	校内研究と理科の実践
255	山口 有一	同僚と考え, 創る美浜中学校の教員文化
256	山田 啓子	通級による指導の教材のつながりを探究する
257	山田 俊行	協働への道
258	吉川 長利	21世紀型学力とそれを育む教師の協働
259	飯田 吉則	ICT 活用 100 のポイント
260	大橋 武史	協働がもたらす学びのカタチ
261	幸坂 浩	実践コミュニティの価値を捉え直す
262	佐藤 恵美	共に実践し, 学び, つかむ
263	宮本 泰成	つなぐ・繋ぐ・TSUNAGU

Schedule

4/2 Sat 開講式

4/16 Sat -17 Sun 4月合同カンファレンス A日程

4/23 Sat -24 Sun 4月合同カンファレンス B日程

5/14 Sat 5月合同カンファレンス A日程

5/21 Sat 5月合同カンファレンス B日程

【編集後記】 締めくくりの時季になると、あの人の言葉やあのときのできごとが、様々な感情と共に湧き上がって私を包みます。それらがやがて、私の中に沁み込むと、私の内奥にある声を引き出され、新たな出会いに向かう勇気と希望に変容していくようです。そんな言葉やできごとや勇気や希望…をもって、春の光の中へ踏み出してまいりましょう。本年度もよろしく願いいたします。(宮下)

教職大学院 Newsletter **No.82**

2016.4. 2 内報版発行
2016.4.16 公開版発行

編集・発行・印刷
福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻
教職大学院 Newsletter 編集委員会
〒910-8507 福井市文京 3-9-1
dpdtfukui@yahoo.co.jp